イスラーム国

アブドルバーリ・アトワーン・著
春日雄宇・訳
中田考・監訳

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

日本の読者のみなさまへ――日本版への序にかえて

私が同志社大学の招きで来日し、「イスラーム国」の問題について講演をしたとき、日本人ジャーナリストの後藤健二氏と、小規模な警備会社の経営者、湯川遥菜氏が人質となった事件が最も重大な局面にあった。二人を人質に取った「イスラーム国」は、二人の解放条件として二億USドル(約二四六億円。以下、二〇一五年七月現在でのレート、一USドル=約一二四円で換算した場合の額)の支払いを日本側に要求した。「イスラーム国」側はのちに条件を変更し、二〇〇五年にアンマンで起きた爆破事件(一〇〇人以上が死傷)に関与し、死刑判決を受けヨルダンに収監されていたサージダ・リーシャーウィーの釈放を要求した。

多くの日本人が二人の安否を気遣い、安倍首相はヨルダンに特使を派遣したが結果は失敗に終わった。「イスラーム国」はリーシャーウィーの釈放に七二時間の期限を設けたが、ヨルダン当局が彼女を釈放することはなかったためである。

ヨルダン当局の誤りは、リーシャーウィーを釈放しなかったことにある。ヨルダン当局は、日本人の人質の映像が発表される約一カ月前に「イスラーム国」が拘束していたヨルダン人パイロットのムアーズ・カサースバの「生存が確認できなかったため」と説明し、決定を正当化した。リーシャーウィー死刑囚の釈放に

よって日本人の人質二人が釈放され、ヨルダンの国内状況も改善される可能性があったにもかかわらず、である。ヨルダン当局がこのような決定を下した背景には、私達の知らない事情が隠されている可能性もあるが、その背景を知るには時間を要するだろう。

後藤健二氏と湯川遥菜氏の二人の人質に対して行なわれた野蛮な処刑は、「イスラーム国」の脅威が中東地域に留まらず、中東から遠く離れた日本を含めた、世界全域に及んでいることを示したといえる。アラブ人とムスリムにとって、日本は尊敬と敬愛の対象である。日本は西欧諸国と異なり、アラブやムスリムの土地を植民地化することはこれまでになく、日本が奇跡的な経済発展を遂げ、彼らの模範となったためだ。

「イスラーム国」は世界で最も大きい脅威の一つであり、それは全く新しいタイプの脅威といえるが、その理由は三つある。

一つ目は、「イスラーム国」が経済的に自立した組織であるということだ。彼らはモスルのイラク中央銀行から五億USドル(約六一五億円)を強奪したうえ、石油の販売で一日あたり約二〇〇万USドル(約二四六億円)の収入を得ているほか、シリアの約半分、イラクの約半分を占める広大な支配地域の住民約一〇〇〇万人から税金を徴収している。

二つ目は、兵器の自給体制である。「イスラーム国」は、イラクとシリア両国

の政府軍拠点を制圧し、アメリカ・ロシア製の最新兵器を大量に鹵獲(ろかく)した。また、二七〇〇を超える戦車、装甲車、軍用車両を所有している。

三つ目は、自ら制圧した地域を統治する能力を有していることである。こうした能力は「アルカーイダ」は持ち得なかった。「アルカーイダ」は、スーダンや「タリバーン運動」の客人に過ぎなかったのである。このことは、「イスラーム国」を支配地域から排除するには、強大な軍事力を必要とすることを意味する。

アメリカが主導し、六〇カ国が参加する「有志連合」による空爆は、「イスラーム国」を弱体化することに成功していない。「有志連合」は地上作戦の任務をイラク軍に託しているが、これも成功するかは疑わしい。地上作戦は宗派主義的な動機に基づいており、イラク国民すべてが結束して作戦を行なっていないからだ。加えて、訓練と兵器支援に二七〇億US$ドル(約三三兆二〇〇億円)を費やしたイラク軍の士気は低い。

国際社会が結束して綿密で完璧な戦略を建てないかぎり、「イスラーム国」に対する作戦が成功することはないだろう。この「戦略」の主柱は、思想的なものである必要がある。

私は本書の執筆にあたり、「イスラーム国」の全体像を示すべく努めた。そして「イスラーム国」がシリアとイラクの地において何を母体としていかに勃興し、伸張したか、そして、いかに彼らがSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サ

ービス）などのメディアを駆使し、世界中の多くの若者を惹きつけ、取り込んでいったかについても示したつもりである。「イスラーム国」の強力なメディア戦略については、一章を費やして詳しく解説した。

日本のみなさまは、この血塗られた組織の実態を直視する必要があると思う。彼らを分析することが、自らの身を守ることにつながると知ってほしい。彼らの脅威が、遠く離れた日本に及ぶことはないと楽観することは禁物である。コミュニケーションの発達により、世界は一つの「村」になりつつある。「イスラーム国」の「電子軍」は、世界各地のありとあらゆる目標に達する力を持っていることは、既に証明されている。

「イスラーム国」が再び、日本人の人質を取り、多額の身代金を要求する事態は今後もあり得るだろう。身代金は彼らの重要な収入源であるからだ。

本書は日本語のほか、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ペルシャ語に翻訳されることになっている。本書を通して一人でも多くの人が、「イスラーム国」が今も領土を拡大しより残虐となっていること、そしてその脅威は日に日に増していることに気付いていただければ幸いである。

二〇一五年七月一日　ロンドンにて

著者　アブドルバーリ・アトワーン

訳者まえがき

本書の著者、アブドルバーリ・アトワーン氏に初めて会ったのは、二〇一一年夏、カタールの首都ドーハでのことである。私はこの頃、仕事の関係でシリアの首都ダマスカスとドーハを行き来する生活を送っていた。いわゆる「アラブの春」がシリアに波及、四〇年にわたり独裁制を敷いてきたアサド政権に対する反体制運動が始まって半年になろうという頃で、大規模な反体制デモと武装蜂起、これらに対する当局の苛烈な弾圧でシリア国内は大混乱に陥っていた。カタールの「アルジャジーラ」に代表されるアラブ湾岸諸国のメディアは、反体制派支持の姿勢を打ち出し、反体制派の主張やシリア国内の惨状を連日大きく報じる一方、シリア国営メディアは弾圧を真っ向から否定、「欧米・アラブ湾岸諸国に使嗾(しそう)されたテロ組織と戦っている」と主張、衛星放送チャンネルを舞台とした「メディア戦争」も激化していた。

アラブ湾岸諸国メディアを中心としたアサド政権非難の嵐に対し、アサド政権側が用いた対抗策は、「遮断」という従来通りの古典的なものであった。「アルジャジーラ」等の衛星放送チャンネルは当局による電波妨害で視聴困難となり、多くのニュースサイトがインターネット上で閲覧不能となった。

バッシャール・アサド大統領就任(二〇〇〇年)直後より、政権は「開放・改革

・進歩」といった言葉を盛んに使いながら「新生シリア」を国内外にアピールしたが、その象徴が国内メディアとインターネットの自由化だった。政府に批判的な論調の新聞が発行され、政府や独裁制を揶揄するドラマが国営テレビで放映された。しかし二〇一一年の反体制運動を前にした政権は、これまでの自由化をいとも簡単に否定した。そもそも政権は、自らの支配の正統化のために「開放・改革・進歩」という言葉を玩んでいただけだったのだろう。

二〇一一年当時、いったいどれほどの新聞やニュースサイトが販売・閲覧禁止になっていたのだろうか。反体制活動家が数人で運営しているような自称・通信社を含めれば、数百に上ったと思われる。その中で最も有名な新聞の一つが、アブドルバーリ・アトワーン氏が当時主筆を務めていた、イギリスのアラビア語日刊紙『クドス・アラビー』であった。電子版は、アクセス規制を解除するソフトウェアを使えばなんとか読むことができた(正しく表示されないことがよくあった)が、紙版はまず手に入らなかった。

あの頃、ドーハに居る間のささやかな楽しみは、寒いほどにエアコンを利かせた部屋で、パパイヤを食べながら、『クドス・アラビー』のような、シリアで販売が禁止されている新聞を読むことだった。電力不足で停電が続き、政情不安で輸入品が高騰していたシリアに頻繁に渡航する身には、エアコンもパパイヤも、販売禁止の新聞同様に貴重なものに思われた。

愛読していた『クドス・アラビー』主筆との出会いは、思いがけないものだった。ある日本のメディアとアトワーン氏の対談の通訳を、私が務めることになったのである。ホテルで予約したアメリカ車のハイヤーでドーハ空港に迎えに行った私に、アトワーン氏は開口一番、BBCの討論番組等で聞き慣れた、あのよく通る声で、「君は日本人だろう？　日本車に乗って迎えに来るべきだとは思わないか？」と笑った。

『クドス・アラビー』がシリア当局によって販売・閲覧が禁止されているにもかかわらず、シリア反体制派の間でのアトワーン氏の評判はあまり芳しくなかった。二〇一一年の初夏、ダマスカスに住む反体制派の知人は苦い顔でこう言った。

「アトワーン氏はフェアだが、『アサド政権が揺らぐとアルカーイダがシリアで台頭する』『アサド政権は延命し、ジハード主義者の伸張を危惧する欧米アラブ諸国もこれを容認する』と、シリア革命に対しネガティブなことを言って不安を煽(あお)っている。シリアでアルカーイダが台頭することなどあり得ないのに……」

アトワーン氏自身、こうした「不評」を十分承知しており、ドーハでのインタビューの合間の雑談の際には「私は何を書いても嫌われるからね」と苦笑していた。ちょうどこの時、リビアのカダフィー政権が崩壊間近と盛んに報じられていたが、アトワーン氏は「カダフィー政権崩壊後に強力な暫定政府がすぐに樹立されなければ、リビアはアルカーイダの『楽園』となる。アルカーイダは『NAT

Oがカダフィーの武器庫を開放してくれた』と感謝するだろう。そしてマリやアルジェリアは、アルカーイダの第一目標となる」と警告していた。二〇一三年一月にアルジェリア人質事件が発生した際、私は真っ先にアトワーン氏のこの言葉を思い出した。そしてその後、「ヌスラ戦線」や「イスラーム国」がシリアで台頭した経緯については、改めてここに書くまでもない。

私が最後にダマスカスに滞在した二〇一二年の夏、複数の知人からシリアの現状について話を聞く機会があった。彼らの中には政権支持派も反体制派もいたが、誰もが「『アルジャジーラ』などを視聴していると、まるでアサド政権が明日にでも崩壊するような気がしてくる」と話していた。政権支持派の知人の場合は、その後に「欧米アラブ諸国のメディアがこのような演出を行なって、国内の反体制派を扇動している」と続けて息巻き、反体制派の知人は「『リビアのように、欧米アラブ諸国がアサド政権打倒のために私達と戦ってくれる』という幻想を抱いてしまった」と続けて、嘆息するのであった。

アトワーン氏は「アルジャジーラ」等とは逆の見方で「アサド政権が短期間で崩壊することはない。当の欧米アラブ諸国がそれを望んでいない」と発言し続け、アサド政権の早期崩壊を信じる反体制派、「アサド政権は欧米アラブ諸国の陰謀に勇敢に立ち向かっている」と信じる政権支持派双方から嫌われることになった。しかし、シリア情勢はアトワーン氏が二〇一一年に予測した通りにほぼ推移した。

多くのアラブ諸国メディアのシリア報道が、自らの希望的観測をあたかも冷徹な分析の結果であるかのように披瀝（ひれき）した「専門家」によって占められたことは、「シリア革命」最大の悲劇の一つであろう。

ダマスカス市内での自爆攻撃や暗殺が、そう珍しいものでなくなってきた頃のことである。私の家の近所に住む初老の男性が自宅で殺害された。彼は「反体制武装勢力の自由シリア軍に協力した」との嫌疑で治安部隊に逮捕され、数カ月拘留されていたが、「証拠不十分」で釈放されたばかりだった。釈放された翌日、自宅に押し入って来た覆面の男達によって、彼はナイフで首を切り裂かれ殺されたのだった。凶行の直後、反体制派の住民は「彼を立件できずに釈放せざるを得なかった当局の連中が、シャッビーハ（親政府系の民兵）に命じて殺害させたのだ」と噂し合った。すると政権支持派の住民がこれに対抗するかのように、「当局への情報の漏洩（ろうえい）を恐れた自由シリア軍が口封じで殺した」という噂を流し始めた。人々の噂は止むことはなく、政治に全く無関心な住民が「彼を殺したのはシャッビーハでも自由シリア軍でもない。離縁された前の奥さんが、どさくさに紛れて人を雇って殺害させたに違いない」という噂を流し始めた時には暗然とした。

この殺人事件への住民達の関心が薄れ始めた頃、私は、殺された男性を子供の頃から知っているという老人を訪ねた。彼は「近所の人間達が、勝手なことを言っているが、いったい誰があいつを殺したんだ。いったい誰が……」と、暗い目

で自問し続けていた。数日後、私は再びこの老人を訪ねた。他愛のない世間話をするはずが、また不穏な世情の話題になった。すると、彼の傍らにいた次女が、「この国で一体何が起きているのか、何が起きるのか、誰にもわからない。ロンドンのアトワーンさんは知っているかもしれないけれど……」と、アトワーン氏の名前を口にした。これを聞いた老人は、少し元気を取り戻した様子で「そうだ、アトワーンなら知っているだろう。彼は我々の革命に難癖をつけることもあるが、情勢を良くわかっている男だ」と言った後、「カリフが再来するまで、アトワーンにシリアの暫定大統領になってもらうのも悪くないな」と、不思議な冗談を口にして、少しだけ笑ったのだった。

春日雄宇

はじめに
日本の読者のみなさまへ――日本版への序にかえて……3
翻訳者　まえがき……7
知っておくべきこと……23
安定と伸張……25
アラブの春とそれに代わるもの……27
イラクのフセインが、イスラーム国の最初の種を蒔いた……30
異なる世代……32
野蛮さのルーツ……35
イスラーム国の特異な性格……38
イスラーム国は当初、「ムスリム同胞団」的なものだったか？……40

第一章　イスラーム国の構造と構成員……45
「国家」とは何か？……46
カリフ制の樹立……49
イスラーム国の内部は、どのように運営されているか……52
イスラーム国を取り巻く政治状況……59
有志連合による軍事介入……63

史上最も裕福なテロ組織……67
イスラーム国誕生の年譜……72
新たなカリフ制の誕生……82

第二章
アブー・バクル・バグダーディーへの道……89
厳格なイスラーム主義への道……96
強い指導力……100
その人気……103

第三章
イラクのルーツ……105
メンバー同士の内部抗争……112
「ヌスラ戦線」のイスラーム国からの離反……115
ウサーマ・ビンラーディン……124
新たな過激主義と暴力の波……125
アラブの革命……131
ジハード主義者のイラクへの流入……136
軍事作戦の開始……142
破綻したイラクとそのマーリキー政権からイスラーム国が得たもの……154

第四章　シリアのイスラーム国
――その背景　……171
シリアの政治と宗教　……173
現代シリアにおけるラディカルなイスラーム主義　……177
シリアの外交関係　……184
シリア反体制派の概要　……189
「シリア革命」から「シリア内戦」へ　……194
国際社会の反応　……199

第五章　パワーの源泉
――ワッハーブ主義、サウディアラビア、アメリカとイスラーム国　……211
ワッハーブ主義とは何か　……213
サウード王家とワッハーブ主義の関係　……217
西側との同盟――サウディアラビアとアメリカ　……226
宣教――蒔かれたワッハーブ主義の種　……235
ジハードの宣揚と資金援助　……238
メディアのコントロール　……246

第六章　野蛮さという戦略 …… 253
戦闘における残忍さの歴史 …… 255
野蛮さの「マネージメント」 …… 262
野蛮さの原点とイスラーム法上の解釈 …… 269
敵を挑発し、消耗させる …… 276

第七章　イスラーム国の外国人戦闘員 …… 283
次第に形成されていったネットワーク …… 286
チュニジア人、リビア人、モロッコ人の参加 …… 292
ジハード主義者向けオフィス …… 297
なぜイスラーム国は多くの外国人戦闘員の獲得に成功したのか？ …… 301

第八章　反アルカーイダとしてのイスラーム国 …… 309
――敵対する兄弟
ザルカーウィーの行動 …… 313

第九章　野蛮さをあえて宣伝することの意味……325
西欧の若者のリクルートが第一目標……330
失敗したメディア戦争……334
カメラのレンズに映し出されるバグダード……337

第十章　西欧とイスラーム――危険なゲーム……341
カリフ制の支援……342
石油の保障と西欧の外交政策……345
共産主義は「最大の敵」……348
ラディカリズム――西欧の問題……353

第十一章　イスラーム国の未来……361
トルコが抱える問題……366
シリアの「覚醒評議会」……368
失敗、あるいは成功の可能性……371
パレスチナ問題……373

監訳者・解説……380

はじめに

知っておくべきこと

ヒラリー・クリントン前米国務長官は、あるインタビューにおいて「イスラーム国は『イスラーム』でもなければ、『国』でもない」と発言した。しかし実際に起きていることは、彼女の見解とは異なる。たしかに彼女の発言は、イスラーム国を他の諸テロ組織、特にアルカーイダと同じようなものと見做し、「テロとの戦い」で一致団結しようとしている西欧諸国、アラブ・イスラーム諸国にとって都合のいいものであり、好意的に受け取られたことであろう。しかし、イスラーム国のルーツと急速な伸張を探ると、この組織が国境を越える組織というよりはむしろ「国家」に近いものであることに気づかされるのである。

近現代史で最大の大英帝国を打ち立てたイギリスの面積よりも広い地域を、一組織が支配下に置くことに成功する、このような事態が起きたのは、過去数百年の歴史でおそらく初めてであろう。本書の執筆の時点でイスラーム国は、イラクの半分、そしてシリアの半分を支配下におさめ、「サイクス・ピコ協定」(第一次世界大戦中の一九一六年五月、イギリス、フランス、ロシアの間で結ばれ、オスマン帝国領の分割を約した秘密協定。後述P.116〜)以来初めて、新たな国境線を画定した。過去に栄えた帝国が行なったように、イスラーム国は完全に支配し自立可能な国境線を引いたのである。本書は、イスラーム国の成功や失敗の事例ではなくむしろ、形成に至る過程、伸張と将来の目標に焦点を当てて論じたいと思う。

イスラーム国は、アルカーイダの「新たなコピー」ではない。アルカーイダとは異なるイデオロギーや形成過程、目標を持った組織である。アルカーイダは、第一目標を「西洋、特にアメリカとの戦い」に据え、アラビア半島からの欧米の軍隊の放逐、ユダヤ人と「十字軍」の殺害を企図している。そしてイエメンで発足して以来二〇年もの間、他のイスラーム組織との戦いを避け続け、ようやく最近になって自らの生存のためにイスラーム組織との戦闘を行なうようになった。

一方、イスラーム国は、地域社会の崩壊や中央政府の弱体化、西欧の軍事介入、国民的リーダーの不在、宗派対立の激化、政府によって周縁化し遠ざけられた国民の怒りといった事態を好機と捉え、混乱に乗じる形で、自らのイデオロギーに基づいた国家を建設することを第一の目標としている。

イスラーム国のイデオロギーは、アルカーイダや他のサラフィー・ジハード主義組織（「厳格派」とも呼ばれ、初期イスラームの時代［サラフ］を模範とし、それに回帰すべきであるとする、イスラーム教スンナ派の思想を信ずる人々）と共通している。例えば「ハーキミーヤ」（マディーナ［アラビア半島の都市で、メッカに次ぐイスラームの第二の聖地。「メディナ」ともいう］において行なわれたように、シャリーアに確固として基づく統治を行なうとする）、圧制者（タクフィール。シャリーア（コーランと預言者ムハンマドの言行［スンナ］を法源とする法律。一〇〇〇年以上の運用実績があり、イスラーム法、イスラーム聖法などとも呼ばれる）に基づく統治を行なわない体制はすべて不信仰者の体制とみなす）、「忠誠と絶縁」（純正な一神教を奉ずるムスリム共同体への忠誠、不信仰者や背教者との絶縁）、変革と目的達成の手段としてイスラームの理論的、信条的宣教から武力によるジハ

ードへの移行、といったものであるが、特に重要なのは圧制者たちの打倒とシャリーアの強制である。

しかしイスラーム国が他のジハード主義組織と異なる点は、自らのイデオロギーに基づき社会を根底から変革すること、変革のためには残忍な行為も厭わず、むしろ敢行すること、圧制者と西欧(彼らにとっての「不信仰者」)による植民地支配を区別して考えないことである。

アルカーイダは国家を建設せず、あくまで一個の「ジハード主義組織」であり続けている。自らの拠点作りのために土地を占拠することもなく、常にアフガニスタンやイラク、イエメン領内の「客人」であった。一方イスラーム国は、イラクとシリアの広大な土地、石油と水(チグリス・ユーフラテス川)を手中に収め、自らの法律を施行し税(マクス)を徴収し、そして「シャリーアとアキーダ」に反した領民に法定刑(フドゥード)を科しているのである。

安定と伸張

ジハード主義組織が土地を占領して完全な支配下に置いた事例は、これまでにないと思われる。他のジハード主義組織が成し得なかった行為を、イスラーム国は実行に移したのである。これを可能にしたのが、イスラーム国の自給体制である。彼らはシリア東部と北部(デリゾール、ラッカ)の油田と精油所を制圧、石油の販売で毎日二〇〇万USドル(約二四六億円)の収入を得ているとみられている。また、制圧したイラクの都市にある中央銀行から五億USドル(約六一五億円)(の現金、

つまり現地通貨、USドル、その他の通貨）、純金を得た。これに加え「マクス」と呼ばれる税金、誘拐で得た身代金も「財源」となっている。湾岸諸国政府や個人の資金援助に依存するアルカーイダや他のジハード主義組織とは異なり、イスラーム国は経済的に自立している。

また武器の「自給」に関しては、イスラーム国はイラクのモスル（イラク北部に位置し、古代のニネヴェの遺跡と世界有数の石油生産で知られるイラク第二の都市）を制圧した際、政府軍の武器庫から大量の武器を入手、加えてアメリカ製の戦車、航空機、大砲も鹵獲（ろかく）した。シリアにおいても、彼らは北西部のアーザーズで「自由シリア軍」が所有していたアメリカ製を含む多数の武器を鹵獲しているほか、ラッカやデリゾール、アレッポ（シリア北部、トルコとの国境に近い都市）では政府軍の基地や軍用空港でも武器を鹵獲した。

アラブ諸国の人々、特にSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）で広く流布している説に「イスラーム国はアメリカが作った」というものがある。しかし実態は、アメリカがイスラーム国を設立したのではなく、アメリカがアラブ人、ムスリムを標的として引き起こした敵対的で破滅的な戦争――アメリカと同盟者の湾岸諸国によるイラク戦争とイラク占領など――の結果、イスラーム国が誕生したと考えられる。アメリカのイラク占領以降の一一年間は、国内のスンナ派を周縁化し、無視、蔑視する政策が採られたが、この政策によりイスラーム国誕生のための種が蒔かれ、やがて成長していったのであった。それは、同じように抑圧された世界各国の数十万人のムスリムをこの「国」が作り出したモデルに惹きつけることになる。

イスラーム国の誕生は、アメリカのイラク占領の当然の帰結ともいえる。占領が宗派対立の種

を蒔き、スンナ派が占領に対する抵抗組織を結成し活動を開始した後、復讐の応酬が激化した。シーア派側にも占領に対する激しい抵抗運動は存在したが、それは例外にとどまり運動の主力にはならなかった。

アメリカは「中庸なイスラーム主義者」を自らの目的達成――ジハード主義者との戦い――に利用してきた。アフガニスタンにおいて、アメリカは「中庸なイスラーム主義者」を「悪の帝国」の共産国と戦うために支援したが、同時に、独裁政権を「地域の安定」を名目に支援する政策をとった。

アラブの春とそれに代わるもの

「アラブの春」と呼ばれる革命はしかし、発生から一年と経たぬうちに内部抗争に陥り、破綻国家の誕生と血塗られた混乱を引き起こした。主に湾岸諸国とイランの介入により、それらの革命は破綻国家と化し、内戦、宗派対立、地域間・部族間抗争が勃発した。

この混乱は結果的に、イスラーム国を筆頭とするジハード主義組織を利することとなった。悲劇的状況は、彼らにとって強大化の好機となったのである。

トニー・ブレア(イギリスの元首相。在任期間は一九九七年五月―二〇〇七年六月)は、西欧のアラブ地域支配を専門とする「思想家」であり、「イラク戦争の技師」ともいえるが、彼は「アラブの春」の当初、「こうした変革運動は良い兆候だ」と歓迎する一方、「ただし、こうした運動は西欧の利

益に資するようにコントロールされる必要がある」とも述べていた。これはアラブの春を失敗させ、正しい発展を歪め、軍事化と武装闘争へと舵を切らせるための西欧諸国の介入の隠れた意図を説明する。

アラブの革命は、必然の動きであったことは間違いない。腐敗した暴力的なアラブ独裁政権は、結果としてアメリカとイスラエルの安全を保障していた。が、こうした革命運動にも欧米の介入が存在していた。リビア革命は、ドーハのシェラトンホテルの厨房で作られたようなものである。ドーハこそが「革命の司令室」だったのだ。同様のことは、シリアにおいても言える。国民評議会の結成は、パリのホテルで行なわれた。パリのホテルは、シリアの革命家の「聖地」となり、政権を離反した人々の拠点ともなったのだ。

イタリアのベルルスコーニ元首相は地元通信社のインタビューにおいて「フランスのサルコジ大統領こそが、リビア革命を実行した」と述べた。フランスの哲学者アンリ・レヴィは「イスラエルのために、この革命を称揚した」旨の発言をしている。

ロンドンがシリア反体制派の政治活動・メディア活動の拠点となったことは決して偶然ではない。ウィキリークスによれば、シリア革命が起きる二年前、米ＣＩＡがシリア反体制派のテレビ局に多額の資金援助をしたことが判明している。フランスのデュマ元外相は、フランスのテレビ局のインタビューで「革命の二年前、ロンドンを訪問し英外務省高官に面会した際、『イギリスはシリアの体制を混乱させるために行動する用意がある』と私に語り、この行動に参加するようオファーを受けたが、その時は拒否した」と認めた。

アメリカによるイラク占領と占領がもたらした数十万人の国民の死は、イスラーム国の種に「肥沃な土地」を提供したようなものであった。

マリへの軍事介入、「独裁政権打倒を目指すシリア革命の支援」と称して行なわれた欧米アラブ諸国によるシリアへの介入もまた、イスラーム国台頭と強大化、短期間での急速な拡大の原因を作った。サウディアラビアとカタールは「穏健なシリア反体制派」支援のため、数十億ＵＳドルを費やした。カタール政府の諜報部門のトップはＢＢＣに対し「アメリカ政府とＣＩＡとの調整のもと、穏健な反体制武装勢力への軍事支援を行なった」と述べた。彼は、「カタールがテロリストを支援している」との批判に反論する形で、この軍事支援を認めたのである。

二〇〇三年のイラク占領はアルカーイダの「再興」を結果的に助けた。アルカーイダは「九・一一」に端を発する米軍のアフガニスタンへの軍事作戦（民間人の死者が戦闘員の死者を上回った）により大きな打撃を受けた。この時、組織の九〇％が壊滅する状態に陥ったとみられている。しかしイラク戦争の後、イラクは様々な武装組織のシェルターとなった。この過程で、アブー・ムスアブ・ザルカーウィー（後述）が大きな役割を果たすことになる。その後イラクのアルカーイダは、米軍の空爆、駐イラク米軍司令官のペトレイアスの主導により対アルカーイダの目的で設立された「覚醒（かくせい）評議会」（イラクで勢力を拡大するアルカーイダへ対抗するため、各地の地元部族が中心となり設立された自警団的組織。実質的な設立者はアメリカ軍人・元ＣＩＡ長官のペトレイアス。後述P.152）により弱体化した。シリアで平和的に開始された革命はやがて武装闘争に変容していったが、イラクのアルカーイダは、隣国の混乱に目をつけたのである。

預言者ムハンマドがクライシュ族の弾圧を逃れて移住したように、イラクのアルカーイダはシリアに移住した。初期の移住者の中には、アブー・ムハンマド・ジャウラーニーがいた。ジャウラーニーはイラクのアルカーイダのシリア支部「ヌスラ戦線」(シリアで活動するサラフィー・ジハード主義の反政府武装組織)設立の命を受け、送り込まれたのである。本書では、「ヌスラ戦線」設立に至る経緯と、イスラーム国の指導者アブー・バクル・バグダーディーとジャウラーニーの対立についても詳述する(P.113)。

イラクのフセインが、イスラーム国の最初の種を蒔いた

「イラクの元大統領サッダーム・フセインこそが、イスラーム国の思想と機構の基盤を作った」と言うとき、それは決して誇張ではない。フセインは、イラク北部と南部に飛行禁止区域が設定され、イラク反体制派への支援がメディアによって報じられるようになった時、アメリカが政権の打倒を企図していることを悟った。イラク国民を苦しめる苛烈な経済制裁が開始された頃、フセインは将来起きるであろうイラク占領に対抗すべく、イスラーム主義、ジハード主義の宣揚を開始した。

サッダーム・フセインは「イスラーム化」を至る所で実施した。酒屋やバーの閉鎖、世俗主義者(国家における「世俗主義」「世俗的」とは、政治や個人の行動の規範が、特定の宗教の影響から独立していなければならないとすること)による政権支持デモの廃止など、「信仰運動」と称される一連のキャンペーン

が行なわれた。サッダームが自らの血で国旗に「アッラーは偉大なり」と書き込んだのもその一環であった。若者の志願者を集め「サッダーム挺身隊」も結成された。

イスラーム国がモスルを制圧した時、モスル防衛のために駐留していた三万人の兵士は、私服に着替え逃亡した。私はこれまでに複数のメディアに、このイラク現代史で最大の危機ともいえる事件について寄稿し、イスラーム国の成功の背景にあるジハード主義者の戦闘と殉教のイデオロギーと熱情について解説した。記事が発表されたのち、私はある人物から電話でコンタクトを受けた。彼は旧フセイン政権時代の軍将校と名乗り、「このモスルにおける輝かしい勝利は、私の同僚達によるものだ。彼らはジハード主義者に転じ、自発的にイスラーム国に合流し共闘したのだ」と語った。

私がアンマンで会った著名なサラフィー・ジハード主義の理論的指導者であるアブー・ムハンマド・マクデスィーは、イスラーム国とヌスラ戦線の対立について語っていたとき、「新たなイスラーム主義者」あるいは「イスラームの新参者」という言葉を用いた。彼が言う「新たなイスラーム主義者」「イスラームの新参者」とは、旧フセイン政権時代に「イラク共和国防衛隊」や「サッダーム挺身隊」に所属し、のちにジハード主義に感化され自ら信じて自発的に「転向」した者たちのことである。

アブー・バクル・バグダーディーの側近の幹部らに、連合暫定施政当局代表のポール・ブレマーの命によって解体された旧イラク軍の上級将校が多く含まれていることは、決して偶然によるものではないのだ。ブレマーは、旧イラク軍の将校らが宗派によって選別され、排除された将校が暗殺の犠牲となるのを放置した。

イスラーム国の下に世界中から集まったジハード主義者は、ミサイルの取り扱い方、航空機や戦車の操縦、大砲の撃ち方もわからなかった。こうしたジハード主義者の訓練、戦略的な軍事作戦の策定、制圧した都市の統治、諸機関の運営に至るまでを担当しているのが、旧政権の将校達であり、彼らこそがイスラーム国の中枢部を担っているといえるだろう。

異なる世代

イスラーム国の戦闘員の多くが、殉教に憧れシャリーアによって統治された国家の建設を夢想する熱情に溢れた若者で占められていることは事実であろう。しかし同時に、西欧の大学で理工、経済、法学、メディア、文学などの教育を受けたインテリのイスラーム主義者も数多く含まれているであろう。そのことは、YouTubeなどに公開されるイスラーム国が製作した映像や、数カ国語に翻訳された機関紙『ダービク』の内容、ツイッターなどのSNSを駆使したインターネット上の広報活動からもうかがい知ることができる。パレスチナ人医師アドナーン・アブー・カイアーンはその一例である。彼は占領地を後にしイスラーム国に参加、トルコ国境近くでの軍事作戦で戦死した。

一九九六年一一月、私はアフガニスタンのトラボラにおいて、アルカーイダの指導者ウサーマ・ビンラーディンのインタビューを行なった。当時、ビンラーディンは一〇〇〇人程度のイスラーム諸国出身の外国人戦闘員を配下に従えていた。彼らの出身地はイエメン、エジプト、シリア、

サウディアラビア、リビアであり、その中には一九八〇年代にアフガニスタン人と共に戦った、経験豊富なムジャーヒディーンも含まれていた。インタビューの中でビンラーディンは次のように語った。「アメリカに兵士を送ったとしても、私たちは勝つことはできないだろう。しかし、もしアメリカがアラブ人やムスリムの土地に兵士を送ってきたならば、われわれはこれを打ち負かすことができよう。過去の例からもそれは明らかだ」

イスラーム国はこの戦略をアルカーイダから受け継いだ。彼らは「イラクの罠」に欧米諸国を引き付け、落とし込むことに成功した。モスル、シリアーイラク国境、ヨルダンーイラク国境を制圧し、アルビル(イラク北部、クルド人自治区の主都)とサウディアラビアーイラク国境のアルアル、ラフハ両検問所に軍を進めることにより、アメリカと同盟のアラブ諸国に揺さぶりをかけた。アメリカはイラクのクルド自治区と、キルクーク、バイジの油田や製油所が制圧されることを懸念した。アメリカの中東における重要な同盟国であるサウディアラビアは五〇カ国の同盟国をまとめ、シリアのラッカ、デリゾール、アイン・アラブ(コバニ)(シリア北西部の都市で、人口のほとんどはクルド人)にあるイスラーム国拠点を空爆するべく航空機を派遣した。イスラーム国は、アメリカをシリアとイラクという「血の池」に徐々に引き込むことを狙っているようである。

アメリカ政府と情報機関は、イスラーム国を「容易に打倒できる組織」と考え、その実力を見誤った。CIAは当初、「イスラーム国の戦闘員は一万人前後」と見積もっていたが、後に「三万人」と修正した。私の推測では、戦闘員は一二万人あまりに達し、さらに増え続けているとも考えられるが。

ムスリムの若者がイスラーム国に参加している理由は複数存在する。腐敗した独裁政権、宗派対立の激化、経済危機と失業率の増加などがその理由として挙げられるが、主要な理由は、リベラルな世俗国家が若者の理想を実現できなかったことである。

これらの世俗国家は、西洋、特にアメリカの中東地域における支配を阻むことができなかった。そしていわゆる「アラブの春」と呼ばれた運動も、若者の理想を実現する結果とはならなかったのである。

多くのムスリムは当初、「イスラーム国はアメリカとイスラエルによって作られた」と信じていたが、イスラーム国がシリアとイラクで広大な地域を制圧し、欧米諸国の軍事介入が行なわれたことによってその考えは改められ、「イスラーム国は欧米と腐敗したアラブ諸国によって弾圧されている」と信じるようになった。

SNSで行なわれたアンケートで、サウディアラビア人の若者の九二%が「正しいイスラームを体現するイスラーム国を支持する」と答えたこと、そしてサウディアラビアの「覚醒したウラマー(イスラーム学者)」グループが、アブドッラー国王が呼びかけた「イスラーム国の否定」を拒否したことは決して意外ではない。アブドッラー国王は、サウディアラビア国民の間にイスラーム国のイデオロギーが浸透することを懸念し、思想的に対抗しイスラーム国の影響力を排除しようと試みた。国王は、軍事的に対抗するだけでは不十分と考えたのである。

「覚醒したウラマー」はサウディアラビアの若者に「シリアにおけるジハード組織のために募金活動を実施した。「覚醒したウラド政権の打倒を目指すシリア国内のジハード」を奨励し、アサ

マー」は国王の呼びかけに呼応せず沈黙した。その沈黙はイスラーム国に対する密かな支持表明であると同時に、イスラーム国を非難することでイスラーム国側の復讐が行なわれることを恐れたのでもあろう。SNSのような空間においても、イスラーム国を批判する者は誰でも、脅迫などの攻撃に晒されるのである。

イスラーム国は「電子軍」と呼ばれる、高度な技術を持ったサイバー集団を有している。彼らはイスラーム国の思想や行動をインターネット上で批判する者に対して激しい攻撃を加えている。

加えて、イスラーム国が「イスラーム改革運動」であり、ワッハーブ主義の創始者であるムハンマド・ブン・アブドルワッハーブの本来の教えに回帰であると信じる人々が存在する。彼らは、イスラーム国とその思想の源となっているワッハーブ主義との関係、そして「電子軍」に関しては後ほど、独立の章を設けて詳述したいと思う。

野蛮さのルーツ

多くの人々がイスラーム国が使う過剰な暴力に驚いているが、私にとっては、驚くべきことではないように思われる。なぜならシリアとイラクは、アラブ諸国の中で最も血塗られた歴史を持つ国々であるからだ。イスラーム国の「揺籃の地」であるイラクは以前より、血気盛んな国民性で知られていた。イブクの著名な歴史学者アリー・ワルディー博士は次のように述べている。「流血を好むイラク人の気質は、初期イスラーム時代に遡る。彼らにクルアーン（コーラン）を教えた

暗唱者たちは、ナジドから派遣されたベドウイン、粗野な人々であった。一方、シャームの地の人々にイスラームの教えを伝えたのは、ヒジャーズの文明的な商人であった」

また、一九六三年から二〇〇三年までイラク・バース党の幹部らが、彼らに反対する人々にどれほど暴虐の限りを尽くしたかについては、ここで説明するまでもないだろう。一九七九年に全権を掌握したサッダーム・フセインがまず初めに行なったことは、バース党幹部の大量処刑であったことも周知の通りである。一九七九年当時、私は『シャルク・アウサト』紙のアラブ諸国報道部に所属していた。報道部の電話担当者の女性から、在ロンドンの「イラク報道センター」のサアド・バッザーズ所長から数度にわたって電話をかけてきたと告げられた。彼は怒った様子で、私に「話したいことがある」と伝えてきたのだという。

バッザーズと話すにあたり、私は覚悟を決め、神のご加護を願った。イラクの政権は、ミスを犯す人物を決して許さないことを知っていたからである。ちょうどその頃、サッダーム・フセインの政敵であるアブドッラッザーク・ナーイフ元首相が、ロンドンのインターコンチネンタルホテルの前で暗殺される事件が起きた。サッダームが刺客をロンドンに送り込んだのは明らかであった。

電話口のバッザーズは(彼は後に離反し反体制派に合流、衛星放送局「シャルキーヤ」を開設し成功をおさめ、現在は日刊紙も発刊している)は怒り心頭に発していた。彼は私に「君が新聞の第一面で報じた記事は何だ。『イラク革命を主導した一三人の党幹部がクーデター未遂で処刑、アブドルハーリク・サーマライ、アドナーン・フサインも含まれる』とは!」と喚き散らし、「こ

のようなデマに基づいた記事を直ちに訂正し、謝罪せよ」と命じた。

私はバッザーズに対して「政権転覆のクーデターは計画されておらず、誰も処刑されてなどいない、とおっしゃりたいのですか？」と尋ねた。するとバッザーズはこう答えたのだった。「彼らの処刑は事実だが、クーデターは計画されていなかった。彼らはクーデターを計画しようと思っていただけだ。われわれは、誰にも『計画』する隙も与えない」

当時、サッダームはイスラーム主義者などではなかった。生粋のバース主義者であり、世俗主義者であり、国家主義者であった。凶暴な振る舞いをしたのは、イスラーム主義者だけではなかったのだ。一九八二年にシリアのハマで起きた残忍な虐殺事件は、イスラーム主義者によって行なわれただろうか？　事実はその逆で、イスラーム主義者は虐殺の犠牲者だった。

作家のアブー・バクル・ナージー（コード・ネーム）は、『野蛮さのマネージメント―共同体が経験することになる最も危険な時代―』の著者である。同書は、イスラーム国や類似のジハード主義組織の行動を説明する上で最も重要な本となっているが、ナージーはこの中で「不信仰者の政権によってもたらされる安定は、ジハード主義者が実行する凶暴な行ないよりも、より凶悪である。野蛮さをマネージメントすることによってもたらされる成功は、カリフ（預言者ムハンマド亡き後のイスラーム共同体、イスラーム国家の指導者、最高権威者の称号。後述P.49）制の終焉以来、再来が待たれていたイスラーム国家の復興への第一歩となろう。ゆえにジハード主義者は、運動が暴力的になるのを待つのではなく、敵を攻撃し疲弊させることを自ら実行に移すべきである」と述べている。

イスラーム国の特異な性格

ヨルダンの首都アンマンで、私はある若い男と会った。彼は「戦線に赴き、殉教するまで、自分の名前は明かさないでほしい」とした上で、「自分は四年間、イラクのブッカ監獄で、アブー・バクル・バグダーディー・フサイニー・クラシーと共に収監された。同じ監房にいたこともある」と認めた。彼によると、イスラーム国は自らの暴虐をあえて宣伝することによって、すべての人々を恐怖に陥れることを狙っており、これこそがイスラーム国の基本方針であるという。彼らは自らの敵ばかりか、敵に協力していると看做した者をも、最も残虐な方法で死に至らしめ、誰も彼らに反抗しないようにしている、というのだ。これを彼らはクルアーンの次の一節、「われは不信仰者の心に恐怖をもたらす」(3章151節)、そして「私は一カ月の間に、恐怖によって勝利することができた」という預言者ムハンマドの言行(ハディース)を用いて正当化する。男はこう付け加えた。「デリゾール、ラッカ、モスル、ラマーディー、ヒート、ハディーサといった都市を、戦火を交えずに制圧できたのは、この暴虐のイメージがあったからだ」

アメリカが主導した、六〇カ国もが参加しイスラーム国の弱体化と壊滅を目標とした有志連合は、果たしてその目的を達成することができるだろうか？　空爆のみで、彼らは果たして、この目標を達成できるのだろうか？　もし地上軍の派遣が不可欠な場合、どの国が派遣に合意するのか？――こうした疑問は、これから述べる諸前提を十分に吟味する本書の最後で答えを見つけた

いと思うが、前書きで私が述べておきたいのは、アメリカ等によるイスラーム国を標的とした空爆は、逆にイスラーム国を利したと言える。アメリカの空爆によりイスラーム国は多くのムスリムの若者たちが抱いていたその（イスラーム国はアメリカとイスラエルの手先という）イメージを正すことができ、数千人の若者の獲得に成功した。加えて彼らは、自らの血塗られた残虐なイデオロギーが正しいものであったことを再確認し、他のサラフィー・ジハード主義者との間で生じていた対立を解消することができたのである。前出のアブー・ムハンマド・マクデスィーがその一例である。彼は有志連合の空爆の後、イスラーム国に対する非難を止めたばかりか、有志連合に参加する国々を「背教者」と決め付け、「アメリカ―シオニスト連合」に立ち向かうためにジハード主義者たちは団結すべきと主張し始めたのである。同時期、イスラーム国が「ヌスラ戦線」との統合を目指す動きがあるとの情報が流れたが、それは失敗に終わったようである。マクデスィーはこうした言動が元で再び逮捕されることになった。

イスラーム国の中枢部、そして戦場における外国人戦闘員の存在は重要である。彼らはアラブ人、ないしは西欧諸国から来たムスリムである。アラブ人の戦闘員のなかでは、サウディアラビア人が多数を占め、その数は七〇〇〇人とされる。次いで多いのがチュニジア人であり、五〇〇〇人が参加しているとみられる。一方、もっとも少ないのはパレスチナ（一九四八年の国境線＝現イスラエル領）出身者で、二〇人前後とみられている。

西欧諸国から流入した外国人戦闘員の総数は五〇〇〇人、うち一〇〇〇人が英国出身とみられる。西欧諸国政府はこうした事態に際し、自国民のシリアへの渡航とジハード主義組織への参加

を阻止すべく、国籍剥奪の罰則を含む特別な法令を施行せざるを得なくなった。

西欧諸国が感じている脅威は主に二つある。一つは、シリアから帰還した元戦闘員による自国内でのテロ実行――二〇〇一年の九・一一米国同時多発テロ事件、二〇〇四年のマドリードの鉄道駅におけるテロ、二〇〇五年のロンドンでのテロ事件の再来――である。もう一つは、自国の対イスラーム国戦争に反感を抱いた国内のムスリムコミュニティーが過激化し、報復として暴動やテロ活動に走ることである。この問題についても、後述したいと思う。

イスラーム国は当初、「ムスリム同胞団」的なものだったか？

この章での最後の問いであり、決して避けては通れない問いは、「この無口で経歴不詳のミステリアスな男は、いかにイスラーム国を主導する立場にまで上り詰め、カリフを自称し、他のジハード主義組織の忠誠を勝ち取ることができたのか？」という問いである。

この問いに答えることは、想像以上に困難である。私はこの問いの回答を求めるため、アブー・バクル・バグダーディーを知る多くの人々に接触を試みた。バグダーディーの「ジハードの世界への旅路」（バグダーディーの知人らはこう表現した）を辿（たど）るためである。

私は、バグダーディーと近しい人々――同年代の友人、自ら学びイスラーム法学の博士号を取得した「サッダーム・イスラーム大学」の元同窓生ら、住居があったバグダードのトウバジー地区の近隣住民ら――へのインタビューを行った（彼らの全員が、匿名でのインタビューを希望した）。

彼らの証言によれば、バグダーディーとムスリム同胞団(二〇世紀前半のエジプトで生まれ、長い間、非合法組織として政権に抑圧された歴史を持ち、中東地域に広がるスンナ派の代表的な社会運動・宗教運動組織)との接点は一切ないばかりか、バグダーディーはムスリム同胞団を「不信仰者」、「イスラームの宗派から外れた集団」と決めつけていたという。特に、イラクのムスリム同胞団系政党「イスラーム党」に属するターリク・ハーシミーが政界入りして「アメリカに取り入る」形で副大統領の座を得て以降、バグダーディーはムスリム同胞団を激しく嫌悪するようになった。

バグダーディーは、サラフィー・ジハード思想に傾倒しており、ブッカ、アブー・グレイブ監獄(イラクの首都バクダードから西へ約三二キロの場所に位置する施設)に収容されていたときも、周囲の囚人らに「講義」を行なっていたという。

国際ムスリム法学者連盟のユースフ・カラダーウィー師が以前、「バグダーディーはかつてムスリム同胞団に属していた」と発言し、のちにそれを撤回するという出来事があった(この発言の撤回には、何らかの圧力が加えられたのであろう)。

本書では、バグダーディーの人格、彼のジハード思想への傾倒と「ムジャーヒディーン・シュラー評議会」参加への経緯、イスラーム国の指導者に上り詰めるまでの道のりについて詳述するほか、イスラーム国政治・軍事両機構とその運営の実態、急速な伸張を可能にした要因についても考察したい。

なお、私がイスラーム国という名称を本書で使用し、多くのアラブ諸国の放送局や新聞雑誌が使用している「ダーイシュ」の名称を用いないのは、以下の理由によるものである。まず、「ダ

ーイシュ」(「イラクとレバントのイスラーム国」の略)が、すでに使われなくなった名称であること、またイスラーム国の名称は、ロイター、AFP通信の通信社、『タイムス』、『ガーディアン』、『ニューヨークタイムス』や『エコノミスト』などの欧米主要紙によって現在も使用されているためである。

中立の観点からしても、この名称(イスラーム国)は適当であると思う。以前私はあるテレビ番組の出演中、別の出演者から「あなたは『ダーイシュ』ではなくイスラーム国という名称を用いることによって、彼らを美化している」と非難されたことがある。私はこう答えた。「あなたの名前はサルマーンだが、私があなたをウマルと呼ぶことに、果たしてあなたは同意するだろうか?」この出演者は黙ってしまった。

私は本書の執筆にあたり、中立性、事実、学術的客観性を心がけ、最近盛んな、イスラーム国を単に擁護したり、逆に攻撃したりする論調から距離を置くことを心がけ、(明確な立場で主張したいので)本当は好まない中立を選んだ。読者の皆さんに、真実にもっとも近づいてほしいと願っているためである。

本書の執筆は、私のこれまでの文筆生活の中で最も困難な作業であった。それは、本書が取り上げる話題がセンシティブであり、さまざまな見解・意見が存在するためではなく、昨今の政治・軍事情勢が目まぐるしく変化し、さまざまな事件が進行し続けているためである。これらの情勢を追い、分析することは大変な労力を必要としたのである。

私は本書の執筆にベストを尽くしたつもりであり、本書がたとえわずかであっても、現在起き

ていることを理解する上での一助となれば幸いである。もしそうならなかったとしても、私には努力をした者が（来世で）賜る一つの報償をいただければ十分である。

アブドルバーリ・アトワーン

イスラーム国
アブドルバーリ・アトワーン・著
春日雄宇・訳
中田考・監訳

発　行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定　価：2,400 円（本体）＋税
発売日：2015 年 8 月 26 日
ISBN：978-4-7976-7298-5 C0014

ウェブでのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！